PROJECT

資源化される「歴史」と中華ナショナリズムの諸相

文・写真
長谷川 清

共同研究 ● 資源化される「歴史」──中国南部諸民族の分析から（2014-2017）

資源としての「歴史」

現在から過去への問いかけなくして「歴史」は成り立たないとされるが、歴史学の方法論や理論について何冊かの概説書をひも解けば明らかなように、近代歴史学の成立以後、出来事や歴史的事実、歴史叙述、歴史認識、歴史観などをめぐっては長い論争がある。アナール学派による全体史の提唱、集合的記憶、文化史、ミクロヒストリーの手法など、多様な視点が交錯しあうなかで、「歴史」の研究領域は多分野に広がっている。他方、文化人類学では「歴史」が日常的な生活世界のなかで現在の状況の解釈や説明に用いられる点などに着目し、事実や出来事が人々によって記憶され、想起され、主観に基づいて取捨選択されるといった、「歴史」が紡ぎ出される過程やそうした場の様態に関心を示す傾向がある。しかし今日、歴史学と文化人類学の対象は明確に分けられるわけではなく、相互に影響を与えつつ、対話の試みがしばしばなされている（森編 2002）。

ひるがえって中国を対象とする文化人類学において、編年や時系列的な把握を第一義としない「歴史」というジャンルに取り組むことはかならずしも容易なことでない。仮にある特定の時空間で生起した１つの出来事にたいする解釈を試みるにしても、漢籍史料や文献記録、文物、史跡についての理解、時代・地域・テーマごとに細分化された歴史学の研究成果の摂取が要求されるばかりでなく、中国文明という長い伝統を有する全体社会の複雑な政治権力システムや地域社会の構造、民族間関係の実態把握など、いくつもの課題が研究者の前に立ちはだかっている（Faure and Ho 2013）。

観光スポットに指定された南甸土司官署の内部。土司一族の位牌（神位）と写真が置かれている（2008 年 3 月 18 日、雲南省梁河県）。

本共同研究に参加しているメンバーは、これまで中国南部の諸民族を対象に、民族の表象行為や文化資源のジャンル、資源化のポリティクスなどについて共同研究を行ってきた。そして多様な主体間の権力関係や歴史的・地域的布置において、諸集団の来歴を語る神話や伝承、風俗習慣、族譜、宗教儀礼、建築物、文化的景観、祝祭などが資源として戦略的に選び取られ、その表出や利用をめぐってせめぎあいの場が生成される点などを明らかにしてきた（塚田編 2008；武内・塚田編 2014）。

しかし、こうした資源化をうながす力が何に由来するのかについて、さらに詳しく検討する必要性も同時に感じてきた。「歴史」や集合的記憶がその多面性や多層性をさまざまに保持する一方で、それらがナショナルな語りへと成型され、束ねられていく過程をもっと明らかにしていくべきなのではないだろうか。

メンバー有志と何度かの協議を重ねるうちに浮かび上がってきたのが、資源化される「歴史」という論点である。

共同研究の目的と意義

本共同研究の目的は、中国南部諸民族の事例に基づき、エスノ・ローカルな政治社会空間を舞台として、「歴史」が多様な主体によって実利の獲得、あるいはアイデンティティの維持のため、どのように「資源化」されているのか、その位相と動態を批判的・分析的に明らかにすることである。

「歴史」を表象、叙述、再編成し資源化する行為や現象は、それ自体としては普遍的にみられる。だが、資源化という視点からみた時、特定の主体や集団がローカルな実践の場において紡ぎ出した「歴史」は、為政者や権力組織によって、どのような加工と操作の対象とみなされ、新たな文脈性のなかに再配置されていくのであろうか。この点の解明はきわめて重要な問題である。

中国の諸民族には漢族も含めて、歴史的建造物、史跡、文物、起源神話や移住伝説、他集団との対立や葛藤、災害などにまつわる記憶、宗教儀礼、衣食住の慣行など、有形・無形の文化資源が多数ある。今日それらはリストアップされ、大部の資料集として編纂されたりしており、もはや歴史叙述にとっては有用かつ必要不可欠な存在である。太古の神話時代の英雄から始まり、各王朝の時代を経て、中華人民共和国の成立、改革開放時代の今日に至るまで、編年形式による歴史記述が連綿と書き綴られている民族史の類も多く刊行されている。しかし、本共同研究がそれらを単に後追いするだけのものではない点はまず断っておかねばならない。

本共同研究の名称になっている、資源化される「歴史」という視点が射程にしているのは、以下のような問題領域である。今日の中国では、無数の歴史的「本源」から、さまざまな「歴史」の細片をハイブリッドな形で縫合して構築し、それを実利に結びつくものとして「資源化」する傾向がみられる。「歴史」を「資源化」する主体は、各級政府、研究者、知識人、マスメディア、一般民など、複数あり、それらが互いに対立、交渉、妥協しあいながら、資源化の潮流を作り出している。同時に、「歴史」は「資源化」される際に、実用価値的な側面だけでなく、さまざまな認識主体が自分たちの正統性とアイデンティティの維持を担保しようとして構築される側面をも有する。本共同研究では、このような関心に立っ

て、比較研究の対象を大まかに、①記録・記憶、②神話・伝承、③アイデンティティ、④史跡・景観に分け、それぞれが収集した民族誌的データについて分析を進めていく予定である。こうした作業は、政府や知識人の歴史叙述の特徴や中国人の「歴史」にたいするスタンスの解明に寄与するものとなろう。

周恩来銅像。水かけ祭り（1961年4月）に参加したことにちなみ、傍らには「周恩来記念館」がある（2010年9月2日、雲南省、西双版納、曼聴公園）。

中華ナショナリズムと「歴史」資源化の諸相

近年、中国のインパクトが強まり、日本や世界に多大な影響を及ぼしており、中国にたいする関心の高まりとともに、これまで以上に複眼的な中国理解が緊急の課題になっている。それは政治や経済、国際関係といったマクロな視点からの中国理解の分野だけに限られるわけではない。フィールド調査の積み重ねを通じて中国という全体社会にアプローチし、民族誌記述をめざしている文化人類学においても、追究していくべき現代的課題である（瀬川 2004）。

漢族と少数民族からなる多民族国家として自己の再定義を行った中国は多様性と多層性に富んでいる。親族、宗族、地域コミュニティ、エスニック集団など、さまざまな属性を帯びる集団が交錯して創り出されるローカルな政治・社会空間がある。近年の事象だけでも、かつての歴史的建造物の修復や再現、文化的景観の保存を軸に、地域的アイデンティティの構築を図っていく動きが各地で活発化している。神話や伝説上の英雄の彫塑やレリーフがモニュメントとして観光スポットや市民公園の一角に建立されたり、かつての史跡を整備して歴史公園を造成したり、創世神話に基づく祭祀儀礼が当該の民族を代表する祝祭としてイベント化されたりしている。それらは、あたかも太古から連綿と続いている「伝統」として表象されるようになっている。そのなかには、国境地域において典型的なように、改革開放とグローバル化の進行とともに、隣接する国家の地域や民族も巻き込んで編成されているものもある。こうした状況で注目したいのは、資源化される「歴史」と国家・地域との関係である。多民族混住の生活区域や都市空間の整備などにおいて、換言すれば新しく創出されつつある公共空間において進行する民族文化の表象行為やそれと絡まりあった形の「歴史」の資源化は、多民族共存をうながすとともに、「中華民族」の一体性が政治的に強調される傾向が顕著である。そこでは、関係しあう民族の文化資源が総花的に動員され、民族間の融和や団結が謳われている。

周恩来が参加した水かけ祭りについての新聞記事。中国・ミャンマー間の外交史のエピソードである（2010年9月2日、周恩来記念館）。

これは明らかに、中国政府の推進する中華ナショナリズムの発揚とも結びつく現象だが、本共同研究ではこうした動きを記述するだけではなく、より総合的なパースペクティブのもとで、中華ナショナリズムやナショナル・ヒストリーの語りを相対化しつつ、その研究領域を広げていきたいと考える。

今年度の成果については、第1回研究会では稲村務（琉球大学）「資源としての歴史と記憶──アカ種族とハニ種族の事例より」、塚田誠之（国立民族博物館）「歴史の解釈をめぐって──壮族の『民族英雄』儂智高（のうちこう）を事例として」の2つの報告があった。稲村報告は、雲南省南部のハニ族社会を例に、集合的記憶としての系譜、土司遺跡、棚田の文化的景観など、タイプの異なる資源化の現状を比較検討し、それぞれの資源化において主体的な役割を果たしているハニ族知識人の動向を論じた。塚田報告は、中国とベトナムの国境地域において歴史上の人物として影響力のあった儂智高を事例に、民国期以降の歴史叙述（学術論文その他）の変遷をたどりつつ、チワン族の「民族英雄」としての評価が定まっていく過程を分析し、1980年代以降、中華民族の言説や愛国主義の称揚が関与しているとした。また、現代中国の歴史叙述にみられる政治性を指摘し、関連の祭祀儀礼や記念文化活動の分析の必要性を今後の課題とした。第2回研究会では、野本敬（帝京大学）が「イ族系土司・土目にみる歴史の記録と構築について」、長谷川清（文教大学）が「国境地域の〈歴史〉とその資源化──孟連タイ族の事例から」と題する報告を行った。野本報告は、イ族社会の各地に残されている碑文資料の現状を扱い、中華世界への政治的編入がイ族の歴史意識や記録の方法を刷新させた点を明らかにした。長谷川報告は、現存する歴史的建築物であるタイ族の土司官署が文化的記憶の参照点として活用され、「歴史」のナラティブの再構築が進行中である点を指摘した。今後もこのような民族誌データに基づく事例分析を行いつつ、本共同研究を進めていく方針である。

【参考文献】

David, Faure and Ho Ts'ui-p'ing 2013 *Chieftains into Ancestors Imperial Expansion and Indigenous Society in Southwest China*. University of British Columbia Press.
森 明子編 2002『歴史叙述の現在──歴史学と人類学の対話』人文書院。
武内房司・塚田誠之編　2014 『中国の民族文化資源 南部地域の分析から』風響社。
塚田誠之編 2008『民族表象のポリティクス 中国南部における人類学・歴史学的研究』 風響社。
瀬川昌久 2004『中国社会の人類学』 世界思想社。

はせがわ きよし

文教大学文学部教授。専門は文化人類学・現代中国社会論・少数民族研究。編著に『中国の民族表象──南部諸地域の人類学・歴史学的研究』（長谷川清・塚田誠之共編 風響社 2005年）、論文に「少数民族教育と中華民族多元一体構造論──雲南・徳宏タイ族の学校教育の事例から」『近現代中国における民族認識の人類学』（瀬川昌久編 昭和堂 2012年）など。